月刊

こころのとも

第五巻
一月号

毎日の生と死

毎日を死出の旅路と
思いなば
今日一日が
粗末に出来ず

明日無しと
思えば今日を大切に
生きて行かんと
思えんものを

生死への
執らわれ捨てて
ひたすらに
今日一日と
思いて暮らせ

感謝する

今日まで
生きたことに
感謝する

今
生きていることに
感謝する

人生を考え直して みたい人は（一）

いま世界の情勢を見てみますと、資本主義対共産主義というイデオロギーの対立は、ほとんど消えて無くなって来ています。しかし、新たな対立が目立って来ました。

それは、宗教の対立であり、民族の対立であり、国家の対立です。例えば、キリスト教内部の対立、ヒンドゥー教対イスラム教の対立、ユダヤ教対キリスト教の対立、アラブ対ユダヤの対立、白人対黒人の対立、白人同志の対立、東洋人対西洋人の対立、富める国対貧しき国の対立、富める国同志の対立などなどです。

そして、これらの対立がもし激化すれば、原子爆弾の存在する今日、世界は破滅の危険をはらんでいると言えます。

また、日本に目をやりますと、仏教系の多くの坊主は葬式坊主か観光坊主に成り下がって堕落し、それにかわって民衆を救うと称していかがわしい宗教が乱立し、部落差別、男女差別、障害者差別、少数民族差別、朝鮮人差別が、いまだに解消されずにいます。また、明治以来目指してきた近代化は、日本の精神文化のよいところを捨て去って、それを見ることを「恥」とする風潮を作りだし、また、経済的にはいまや世界一の経済大国を実現しました。しかし、物質的豊かさの蔭に進む国民の精神的空洞化は、さまざまの問題を引き起こしています。例えば、それは、スポーツや性への熱狂・享楽ぶりであり、家庭機能の崩壊であり、青少年のさまざまな精神的不健康事象の多発であり、精神疾患の増加、などです。

経済的には、確かに豊かになりましたが、でも、心は満たされていないのではないでしょうか。先日も中野好夫氏の「清貧の思想」（草思社刊）という本がベストセラーになりました。いまや、清貧とか純潔とかという言葉は死語に近いと思うのですが、それを表題にする本が売れるということは、何か経済では満たされないものを、多くの人が感じ始めている証拠だと思うのです。気持ちの上で、何をしても本当にこれでよいと思えることがなくなって来ているのではないでしょうか。

今は変革の時代だと言われます。アメリカ大統領の就任演説だったでしょうか、「変革の時代」という言葉が印象に残りました。また、日本の細川総理も時代が変わりつつあることを印象づけた演説をしたように記憶しています。

確かに、今は変革の時代だと私も思います。しかし、それは共産主義が廃れ、世界中が自由主義になりつつあり、新しい国際関係が発生していることを中心とするもののように思われます。日本に限って言えば、その他にバブル経済の崩壊と新たな資本主義時代を迎えつつあることを意味しているように思われるのです。

こうした変革も時代の変革なのでしょうが、私には、もっと大切な変革が必要なように思うのです。それは、人間自身の生き方、あるいは人類全体の生き方の変革と言えるようなものです。生き方の思想そのものの変革と言えるものです。

しかし、いまの思想界を見渡すとき、そうした変革を示唆するような、新たな思想は殆ど見当たらないように、私には思えるのです。先程あげました「清貧の思想」にしても、それは従来の思想の紹介でしかなく、新しい解釈が加えられているわけではないのです。いま真に求められている思想は、この地球全体が調和を保ちつつ、お互いが「響存」できる生き方を示すものでなくてはなりません。

急に難しい話になって恐縮ですが、それはヨーロッパの個人主義と近代合理主義を克服するものでなくてはならないように私には思えるのです。私のみる限り、そうした哲学はいまだ世界中で構築されたことはないように思えます。

しかし、宗教という実践界では、すでに大昔からそうした思想は存在して来ました。つまり、宗教は常に他者との「響存」を求め続けて来ているように思えるのです。宗教は、自らの幸せと同時に、常に他者の幸せをも願うものであるように思うのです。

ただ、個人主義と合理主義の隆盛に反比例して宗教が廃れてきた現代において、宗教の理論化である「哲学」の中に、そうした他者との響存を真に捉え得るものが存在していないというだけのことだと思うのです。

つまり、今のように個人が先ず尊重され、個人の理性が尊重される状況、その結果として科学・技術が発達し、地球全体の運命を共同で背負わなければならない状況にマッチする哲学が、出現していないということだと思うのです。そういう意味で、今は哲学や思想の変革が求められているのです。それこそが、まさしく変革の時代と呼ばれるのにふさわしい変革であるように思えるのです。

それは、これまで存在した宗教の新たな解釈であり、新たな理論化であり、新たな哲学化である、と言えるように思えるのです。

とても、理屈っぽくなってしまいましたが、しかし、こうした哲学化は何も人ごとではありません。雲の上の絵空事であってはならないのです。皆さん一人一人の毎日の生き方に直接関わるものであり、いま直下の行動指針となるものでなくてはならないのです。

私は、世界の平和と統一を願っています。障害児・者が幸せに暮らせる社会の実現を願っています。その結果、あらゆる人が幸せに暮らせる社会の実現を願っています。そのために、毎日、仏さまにお祈りしています。また、学問に精を出しています。そしていずれ、障害児・者と共に修行できるお寺を作りたい、と常に念じているのです。

「こころのとも」を新装して発行するのを期に、表題の「人生を考え直してみたい人」のために少しでも参考になるように、これまで「宗教」の始祖ともなりえるし、現実にそうなった、聖人と言われた人たちの言われたことを、私が達している学問的枠組みと、哲学とに照らして検討してみたいと思うのです。

過去には多くの解脱に達した聖人があったことと思います。日本にも道元や空海のように真に解脱に達していたと思われる聖人もいましたが、ここでは世界中で歴史的に古い、釈尊と、ソクラテスと、老子と、キリストの四人を取り上げたいと思います。余談ですが、この四人を描いた「四聖曼陀羅」があったらいいのに、と私は常々考えています。真ん中には「宇宙根源の原理」である円とその回りに四人の聖人を巡らせてあったらと思っているのです。

私は、宗教は一つと思っています。違うのは宗派だと思うのです。キリスト教も仏教も宗教が違うのではなくて、宗派が違うだけだと思っているのです。

仏教では、七仏通誡偈と呼ばれる偈があり、それは過去に七人の仏がおられて、教えを説かれたのだが、その教えに共通しているのは、悪をなさず、善をなし、自分のこころを磨くこと、だと教えています。

どの宗教の宗派も、悪をなさず、善をなすことを実践するように求めていると思うのです。それは共通だと思うのです。でも、自分のこころを磨くことを求めている宗派は少ないように思われます。しかし、私の体験として人間が業から救われるには、こころを磨く修行がいるように思われます。私のように欠点の多い、業の深い人間がやっと自分で救われたと思えるようになれたのは、ヨーガのお蔭であり、真言密教の修行のお蔭だったと思います。

来月号から、予定として一年に一人の割りで既にあげ

た聖人を取り上げて行きたいと思っています。釈尊はもう「釈尊のことば」で取り上げていますので、来月号からは、老子を取り上げて行きたいと思います。ご期待下さい。

自作詩短歌等選

仏の恵み

この世に
人間は
引力の働かないところが
生まれながらに
ないように
相対の
故に仏に
対しおりける

み仏の恵みの
届かないところは
どこにもない

人類の破滅

人は
戦争という
野蛮な行為に
勝つために

物の尊厳を
無視して
原子爆弾を
作った

それを
制御できない今
人類は破滅へと
突進している

光

無明を
照らす
光の玉は
自らの
心の中にある

毎日まいにち
ひたすらに
磨いて行こう
いつかは
きっと
輝きだすから

怒りを鎮める

よき御者が
荒馬を鎮め
荷車を引かすが
如く

善き人は
怒りの心を鎮め
貪りの心を捨て
ただ人さまのために
ひたすらに生きる

笑い

笑うのは
人間だけ
だから
出来るだけ
いつでも笑っていよう

笑う門には
福来る

過ち重ねる人生

多くの人は
これまでの人生を
不幸せと思えば
思うほど
お金にこだわり
物にこだわり
肉親にこだわり
世間にこだわり
めんつにこだわり
主張にこだわって
さらに
過ちを重ねていく
それが
ますます幸せから
遠ざかっていることに
気付きもしないで

人がどう思おうと
気にしないで

貧乏に耐える気になって
自分のこだわりを捨てて
あらゆる人に期待しない
で

自分と仏さまだけの
世界を築こう
そして
人には
何もしてもらわなくても
ひたすら
何かしてあげよう
そうしていたら
知らないうちに
幸せが訪れてくるから

大賛成か大反対

他人が犠牲になって
自分が得をすることには
大賛成

自分が犠牲になって
他人が得をすることには
大反対

托鉢路

托鉢路
山には緑
野辺に花

自作随筆選

相手に期待しない

「こころのとも」第二巻十一月号に、『「善き友」となる』と題する随筆を載せました。その中で、人と付き合うときは、その人から何も期待しないようにしよう。例えば、最も身近で親密な人間関係である親子、夫婦の愛情も例外ではなく、相手に期待して、それに執らわれてはならないことを述べました。

しかし、これに疑問や反発を感じる方も多いのではなかと思います。少し補足して述べておきます。

多分、誤解の中心は、「相手に何も期待してはならない」ということを、逆にとられて、たとえ最も深い信頼関係で結ばれていても平気で「相手の期待を裏切ってもよい」と言っているのだ、というふうに受け取られているのではないかと思うのです。

私が言いたいのは、そうではないのです。信頼関係を裏切ることは、勿論、人間としてはしてはならない、とても悪いことであるに違いありません。

私が言いたいのは、たとえ不幸にも親密な信頼関係で結ばれるべき相手が悪い人間で、平気で期待を裏切るような人でも、それによって自分の幸、不幸が左右されてはならない、ということなのです。

人を自分の期待に添わせるには、たとえそれが相手のためを考えた期待ですらも、いつでも限界があります。誰でもを期待に従わせることは不可能なのです。

釈尊にも、デーバダッタという反対者がいました。釈尊が家を捨てて出家した後の、もとの奥さんを犯したり、何回も釈尊のすることを邪魔しましたし、暗殺さえも企てました。また、弘法大師にも当然そうした反対者がいました。でも、それで、釈尊や弘法大師の行動が制限を受けたり、幸せが影響を受けることはありませんでした。

それは、その人から、いや誰からも、何ら期待をしていなかったことを意味しています。それだけではなく、逆に、マイナスの期待、つまり邪魔や裏切りさえも期待していたと言えるのです。

誰でもが、このようになることは難しいと思います。多くの人は、自分の期待、いや自分の醜いエゴに執われた、自分の利益の追求のみを考えるような期待すらでも、それが裏切られることによって混乱し、一層間違いを重ねて行きます。どんどんと、その裏切られたことに執らわれて行きます。そして、ついにはやけくそを起こし、

皆に嫌がられたり、皆の笑い者にすらなります。でも、それを自分で気付けないのが、その人の哀れであると言えます。業のなせるわざなのです。修行していけば、人間はそうした業から抜けられるのに、そうしなかったことの哀れを、皆に示しているのです。

でも、人間には仏さまのお慈悲で、業から抜ける道が用意されています。真に自分だけに依存した幸福を自分の心の中に作り出す道が用意されているのです。

それは、ひたすら修行することです。毎日、ヨーガをするなり、在家勤行式を行ずるなり、お念仏をあげるなり、何らかの修行をすることです。どうぞ、この「こころのとも」の読者の方は、右のような哀れな生き物にはならないように、修行に励んで頂きたいと思います。

自分は、いま家族全員が健康で、家庭も円満で、経済的にも何不足なく、幸せな生活を送っている。だから、そんな話しは関係ないと、エゴイスティックに思っている方があるとしたら、そんな人こそ、不幸はそこに待ち受けているのです。今、不幸な人は、もう不幸になることはありません。でも、エゴイスティックに幸せだと思っている人こそは、今度は不幸になる番です。

人生に栄枯盛衰はつきものです。人生は、無常なものです。その無常が訪れた時、あわてないためにこそ、あるいは幸せを消えていかせないためにこそ、修行はあるのです。どうぞ、修行に励んで、人から何かしてもらう人ではなく、人に何かをしてあげる人になって頂きたいと思います。

釈尊のことば（一九）

―法句経解説―

（七一）悪事をしても、その業（カルマ）は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。（徐々に固まって熟する。）その業は、灰に覆われた火のように（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。

仏教の業の思想には、いろいろな考え方があるようですが、私はその人が持って生まれた素質や環境、そしてそのために成長の過程で行って来た行為など、すべて含めて、現在のその人の行為を規定している全体を業と呼びたいと思っています。

そう考えますと、人間は業の中にどっぷりと漬かって

存在していることになります。ですから、そうした業からなした悪事は、ほとんど自分では悪事と気付けないのです。気付けないということは、その行為がその人自身に新たな業を作り出しているということを意味しています。そればかりではありません。他者にも同様に新たな業を作りだして行くのです。その結果、多くの人は苦しみますが、その苦しみが自分の業の結果だとは思えません。多くの場合、他者が悪いと思ってしまうのです。それこそが、まさしく業のなかにいるのですが、それに気付けないのです。

そうして積もり積もった業は、すぐには気付きませんが、あたかも灰に包まれた火のように、いつまでも燃えつづけて、その人を悩ましつづけるのです。

ですから、誰でも何か不満なことや、悩むことがあれば、それは自分自身が悪いのではないかと、反省してみることです。自分の業の深さに気付くべきなのです。そして、その業から抜ける道を探すべきなのです。

では、探すべき道とはどんな道なのでしょうか。それは、私が常に言っていますように、結局、毎日修行して行くほかない道なのです。人間は悲しいかな、どんなに自分の業が深いことを知っても、それを知るだけでは、その業から逃れることは出来ないのです。知ったら自分で修行しなければなりません。そうしないと、業を知れば知るほど、何歳になろうとも、自分の精神には神が宿って、善をなそうとするのに、自分の肉体に悪魔が宿って悪をなしてしまう、ということになってしまうのです。死ぬまで悪をなし、死ぬまで自分自身が悩み、死ぬまで他人を悩まし続けなければならないのです。

（七二）愚かな者に念慮（おもい）が生じても、ついにかれには不利なことになってしまう。その念慮（おもい）はかれの幸運を滅ぼし、かれの頭を打ち砕く。

この四国の、愛媛県重信川の畔に住む、詩人・坂村真民さんの真言は「念ずれば花ひらく」です。理想を心に念じていれば、その思いは実現するものだ、といったほどの意味だと思います。この坂村真民さんの「念ずれば」は、右の偈で言っています「念慮」に当たっているのではないかと思います。

ですから、この念慮は、自分の生きる目的、生きる理想に思いを巡らすことです。私は、人間には二つの大きな生きて行く上での目的がある、一つは自分自身のより善い生き方を求めることであり、もう一つはより善く社

会的であろうとすることである、と言ってきました。

既に述べたと思いますが、偈で言う「愚かな者」とは、「あたま」がわるい、知的に劣る、ということを言っているのではありません。人間が人間たるゆえんの「こころ」が、愚かであるということです。執らわれがあるということです。

その「こころ」の執らわれの一番大きなものは、食欲（金欲）、性欲（家系欲）、優越欲（出世欲）であると思います。これらは、仏教十善戒の三毒と呼ばれる不慳貪、不瞋恚、不邪見の戒律を犯す基になっているものだと思うのです。こうした欲望への執らわれがきついほど、人はさまざまなことに執らわれて、悪をなしてしまうのです。

偈でいう、愚かな者に「念慮が生じても」、こころに執らわれがありますと、その執らわれを反映して、念ずる内容が自己のエゴイスティックな名利を追求するだけのものになってしまうのです。

人間は名利を得ますと、満足して幸せになるように思われますが、そうではありません。そうしたものを得ますと、ますます自己への執らわれを増やして、真の幸せから遠ざかり、結局、悪をなしてしまうのです。

そうなりますと、偈にいいますように、その念慮は「ついに彼には不利なことになってしまう」し、「彼の幸運を滅ぼし、彼の頭を打ち砕く」ということになってしまうのです。そして遂に、自分の頭を抱えて、自分の不運を呪いながら、あるいはあがきながら、死んでいかなければならなくなってしまうのです。そんな人が皆さんの回りにいませんでしょうか。

（七三）愚かな者は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行っては供養を得ようと願うであろう。

人間は愚かなもので、人に愛されたい、人に尊敬されたい、人に認められたい、人から何かを頂きたい、人より優れたい、人の上に立ちたい、人が出来ないことをしたい、といった虚しい欲望を持ちます。自分が人を愛さない、人を認めない、人にあげない、そういう人ほど、そう思ってしまうものです。この偈に歌っていますのも、その心のことです。

「こころのとも」の一昨年十二月号に「お布施の功徳」と題する次のような歌を載せました。

お布施した　　お布施せよ
してやったりと　　我にすべしと
思うほど　　思うほど
お布施の功徳　　坊主無間の
ばちに変わりぬ　　地獄に落ちぬ

先日も、この歌を地で行くような、坊主と信者のやり取りを体験しました。

世襲の坊主は子供の頃から貰うことしか考えませんから、人さまに感謝することを知りません。人から貰おう貰おうとします。「他人の家に行っては供養を得ようと願う」、その乞食根性にはあきれるばかりです。きっと、無間の地獄に落ちることでしょう。

また、金を貯め、世俗の垢をいやというほど付けた信者は、皆から「尊敬を得ようと願い」自分がお布施した、お布施したと大声で自慢します。そんなことをしますと、もう、お布施の功徳は、悪徳に変わり、雲間の蔭からご覧になっておられる仏さまは、きっと、ばちを当てられることでしょう。

どうか、皆さんは人さまには、恵んでやるといった驕慢（きょうまん）な心からではなくて、「させて頂いてありがとう」という感謝の気持ちで、謙虚に、お布施をして頂きたいと思います。

また、人さまの好意を頂いたときは、心から「して頂いてありがとう」という感謝の気持ちで、謙虚に、その好意を受けて頂きたいと思います。こうして、二つの感謝がそこで響き合うとき、真の人間の在り方が実現されて行くのです。

（七四）「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家した修行者たちも、ともにこのことを知れ。およそなすべきこととなすべからざることについて、わたしの意に従え」　愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢（たかぶり）とがたかまる。

（七三）の解説を書いた時、この偈をまだ読んでいなかったのですが、読んで驚きました。そこで書いたことが、そのままこの偈に当てはまっていたからです。ちなみに、先の驕慢な信者は、「ああしなさい、こうしなさい」と命令口調で人にしきりに指図をしていました。

少しだけ補足しておきたいと思います。それは、「およそなすべきこととなすべからざることについて、わたしの意に従え」という部分です。

この文章を読みますと、宗教は、例えば十善戒のように、なすべきことと、なすべからざることとを決めていて、それに従えと要求しているのに、これは何のことを言っているのか、と不思議に思われるかも知れません。

なるほど宗教は、こうせよ、ああせよ、といろいろ僧団の意に従うべきことを定めているようですが、誰に対しても「私の意に従え」といっているわけではありません。

理解するのが難しいかも知れませんが、宗教は日々、「生かされて生きる喜びを感じる」ためのものです。それは自分を生かしめている者との一体体験を通じて、あらゆる人、あらゆる存在と平等、一体であることを感じるものです。その時あらゆる道徳的、倫理的要求を越えています。つまり、こうせよ、ああせよ、私の意に従え、という要求を越えているのです。

ですから、宗教は無理やり「こうせよ、ああせよ」と意に従うように要求するものではありません。

いやな言葉ですが、縁なき衆生という言葉があります。その人の持って生まれた業によって、宗教が無縁な人もいるのです。その人を説き伏せて「私の意に従え」というのは、驕慢といわなければならないのです。

教団や僧団が決めている「守るべき戒律」は、「生かされて生きる喜び」を感じたいと求めている人にとって意味があるだけです。だれにでも普遍性をもって要求されるわけではありません。勿論、それが法律の中に組み込まれているものもありますが、しかし、それは基本的に無関係なのです。

後記

一、明けましておめでとうございます。早々に賀状を頂きました方、紙面をお借りして、お礼申し上げます。申し訳ありませんが、年賀状は、どなたさまにもご遠慮させて頂いております。今年が皆さまにとりましてよき年になりますよう、お祈りいたしております。

二、実は、この後記は平成五年の十一月末に書きました。本誌も、昨年十二月号で予告致しました通り、ご覧のような印刷本に変わりましたが、早く書くことになりましたのは、印刷費が出来るだけ安くなるように、十分な時間的余裕をもって、印刷して頂くためです。

三、予告いたしました「読者とのエコーミュニケーション」欄は、ですから、まだ投稿が全く集まっていません。来月号には間に合うように、原稿をお寄せ頂ければと思います。何でも結構です。どしどし、ご応募下さい。

四、表紙の写真は、この勝浦町にお住まいで、会社を退

職され、趣味で写真やビデオを撮られている、谷田弘一氏のものです。また、禅画は、徳島県麻植郡川島町に在住の小原白峰（本名・義徳）氏の描かれたものです。同氏は、趣味で禅画を始め、いろいろな絵を描いておられる方です。当分、お二人の写真と絵を使わせて頂きます。ご期待下さい。

お便り、質問、要望、詩、短歌、俳句、川柳など、どうぞお寄せ下さい。

月刊
こころのとも
第五巻
一月号
（通巻
四十九号）

平成六年一月八日
（発行人）中塚　善成（ぜんじょう）
（制作）ユニオンプレス
（発行所）
ひびきのさと（星の岩屋）心光寺
〒771―43
徳島県勝浦郡勝浦町星谷野田尾
一二六

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。　振替口座
清心者寺院心光寺　徳島9―53708